

や市のみが躍起となっても問題の解決には向かわない。市の発展のためにはやはり宇部市の様な共同一致の体制が必要である。そのためには市と市民、市民と企業間で話し合いの場を設けることな

どにより意見の交換を行って、少しずつでも市民の自覚を高め、市を生活の場へと移行させていくべきであろう。

岡山県井原市の衣服工業

江 見 由香里

1. 研究の目的と方法

岡山県はジーンズ生産がさかんな県で、主要生産地区としては岡山市・倉敷市児島(備前)地区と井原市とその周辺市町(備中)地区がある。生産量では備前地区が倍以上を占めているが、それぞれ市の産業という点でみた場合、井原市において最も重要性をもっている。本研究では、井原市におけるジーンズを中心とする衣服工業の発展をおいながら市の産業の中での衣服工業の地位がどのように変化してきたかということ明らかにする一方、業者の実態をさぐり、問題点について考察した上で、今後の衣服工業の役割を考えていく。

方法としては、文献・統計資料・聞き取り調査等により、歴史・現状を把握し、工場でのアンケート調査を主な資料として業者の実態をさぐり、問題点の考察を行った。

2. 要約

井原市では約400年前から綿花が栽培されるようになり、織物も同時にはじめられた。約300年前には藍の栽培が伝わり、藍染めの織物が生産されるようになった。このようにして江戸時代後期から明治・大正と織物業は発展していき、市の中心産業となっていた。

一方、衣服工業は昭和の初め頃にやっと本格的に行われるようになった。地元で生産していた厚地綿織物(小倉地とデニム地、デニム地は当時輸出用)を利用して最初は学生服を手がけ次第に作業服へと移行していった。戦時下、軍服縫製を行い、織物業からの転業者が増え、衣服工業はひとつの発展をみた。戦後、G・Iパンツをまねて地元のデニム地を利用してズボンを生産する業者が現れた。これが「井原ジーンズ」の生産のはじ

まりである。昭和30年代終り頃、アメリカ産の生地を輸入して国内で縫製し、ジーンズを生産する業者が出現し、これがたいへん売れたため、井原でもジーンズ生産へ転換する者、新たにはじめる者が増え、いっきにジーンズ産地として発展し、全国のジーンズ生産の70%を占めるまでになった。しかし、ジーンズが爆発的ブームになるに至り、他産地で有力メーカーが次々と参入したため、零細業者の多い井原市は不利になり、相対的地位は大幅に低下した。現在の全国シェアは15%程度である。

では、市内の諸工業の中での地位はどうかというところ、ジーンズ生産による発展と織物業の衰退により、従業者数・製造品出荷額等とも1位となっていたが、近年、電気機械器具製造業の成長が著しく、現在は製造品出荷額等ではわずかながら追い抜かれている。

ブームが去った後は、生産は伸び悩んでおり、それは業者の実態をみても明らかである。従業者の中心は若年女子から中高年女子へ移行し、製品もブルーデニムジーンズ一辺倒から他製品を加えたり、中心を他製品に移したりしている。かつては自社ブランドをもっていた多くの業者はほとんどが下請け化していった。産地内の織物業者との連携も案外密ではない。

このように問題点が数多く出ているのが現状ではあるが、織物業と同様に地元との結びつきは強く市の産業としての重要性は保ち続けるであろう。また、機械部品工業(輸送用機械器具・電気機械器具)、とくに電気機械器具製造業はますます発展が期待されており、井原市は多元的工業都市へと変貌していくであろう。そのためにも衣服工業

の役割は大きく、問題点の克服に努めることが強く望まれる。技術面ではファッション性をもつ高付加価値製品の生産、多様なニーズに対応するための企画力の強化、地域ブランドのイメージア

プのためのPRの促進、構造面では大手業者と零細業者との連携、零細業者どうしのグループ化による力の結集、産地内織物業者との連携の推進などすすめるべき対策は多い。

多摩川の水質汚濁

—アンモニア性窒素濃度を指標として—

小笠原 洋子

1. 研究の目的

本論文では、羽村取水堰から調布取水堰までの間の9地点について、1974年度から1980年度までの水質試験の結果を利用することによって、アンモニア性窒素濃度を指標として、多摩川の水質汚濁の概況を把握し、その原因を考察し、さらに対策を考えることを目的とした。

2. 研究の結果

アンモニア性窒素濃度の月間値の変化をプロットしてみたところ、夏季は低濃度、冬季は高濃度という季節変化のパターンを示した。これは、夏季に、高温による硝化反応がおこるためと、流量の増大により、希釈作用および河川の自浄作用がはたらくためである。また、アンモニア性窒素濃度は、流量との間にはっきりした負の相関関係をもつことも明らかとなった。経年変化をみると、近年では、浄化がすすんでいる傾向にあることがわかった。縦断変化では、予想されたように、上流から下流へいくほど汚濁がすすんでいることが現われた。これとは別に注目されたのは、比較的上流にある昭和用水堰において、異常にアンモニア性窒素濃度が高いということで、このことについては、現地調査を重ねて行い、原因を追求してみることにした。

昭和用水堰の付近には、コンクリート工場による砂利採取現場や、下水処理場からの汚水の流入などがみられたが、これらはいずれも試験地点よりも下流であるため、原因とは直接には結び付かないと思われた。昭和用水堰の上流へ目を転じると、支川である平井川・秋川が合流しているが、これらはいずれもアンモニア性窒素に関してはほとんど汚濁を受けていない河川であり、これらの

支川を原因とすることはできない。その他に、昭和用水堰のすぐ上流には、都市下水路と福生排水樋管からの汚水が流入している。水質調査の報告をみても、これらは、かなり高濃度のアンモニア性窒素を含んでいることがわかった。特に、都市下水路は、多摩川全域で比較してみても顕著なほど、アンモニア性窒素汚濁負荷量が高いことが明らかとなった。そこで、この都市下水路からの汚水が、多量のアンモニア性窒素をもたらししているらしいとの結論をえた。さらに、堰の下流は、取水により水量が極端に減少している地点であるため、希釈作用・自浄作用が充分はたらかないことも、大きく影響していると思われる。

多摩川の水質汚濁に関する特徴として、自浄作用が大きいことと、流入している排水中の家庭排水の割合が大きいことがいわれている。家庭排水は、多量のアンモニア性窒素を含み汚濁をもたらす原因となるので、多摩川の水質の将来を考える時、このことは大きな問題である。

アンモニア性窒素は水溶性物質であるので、流量が豊かであれば、希釈作用によりうすめられる。また、高流量は河川のもつ自浄力を高めることにもなるので、元来、大きな自浄力をもつ多摩川においては、いっそうの効果が期待される。

そこで流量を豊かにすることが望まれるが、現状は、上流で取水し、下流へ排水するためかえって水量を減少させるという悪循環が行われている。これを打破するためには、皮相的に清浄な水を求めるという態度を改めて、抜本的な対策をたてる必要がある。一例として、上水道と雑用水道の2元給水などが完全実施されれば、所用水量は半減し、流量を増加させ、希釈作用・自浄作用